

静原物語

水上勉

中央公論社

静原物語

検印廃止
©一九七二

昭和四十七年四月二十日初版
昭和五十年三月二十日再版

著者 水上勉

発行者 高梨茂

印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(呉)五九二一 振替東京二二三四

静 原 物 語

装帧·板画

関野準一郎

洛北の市原野から、小町寺を過ぎて、山峽^{やまがけ}みちを右に折れると、すぐ足もとに、深くえぐられた静原川が見える。底の浅い澄んだ水は、大岩にせきとめられると滝になったり、淵になったりして見あきない景色だった。両側は急傾斜の杉苗山と雑木の繁った薪山が、谷が変るごとに相を変えるので、水面は絵具を流したように鮮かな色である。約一里ばかり、曲りくねった道を行くと、やがて盆地がひらけてきて、長閑な村があった。静原の里である。戸数わずか百戸にみたない寒村だった。山や田畑の分配が平均しているとみえて、どの家も似たような敷地に、白壁の倉をもち、石垣造りの門をもち、庭をもち、軒近くに蜜柑や椿やこぶしの木を植え、花どきは、こんなおだやかな村が、こんな山奥にかくれていたことに驚かされる。中国の武陵の漁夫が、道に迷うているうちに、豁然眼の前がひらけて現前したというあの村も、ひょっとしたら、川にだまされて登りつめたせいかもしれない。不思議なことに、静原の里も、いままでそこに見えていた急流は、ひろがる田へ散ってしまふし、車の通る道も、急に細い樵道となつて、大原境の山へ吸われて見えなくなる。行きどまりなので

あつた。瀬谷きぬはこの里に生れた。

きぬの家は、村口から、苗代田とさる農家の土蔵の間を右にとって山へ向い、静原でいえばいちばん日翳ともなる東寄りの台地にあつて、瀬谷藤右衛門といった。茅葺屋根の、そう裕福でもなく、さりとて貧しくも見えない母家、作業小舎、鶏舎、漬物小舎、倉のそろつた家屋敷である。母はかねといい、きぬが八歳のときに早逝し、父の藤右衛門は、かね亡きあと息子の貞吉と家業の炭焼きと持田五反の自作でこの村に生き、のち後妻をもらつて子二人をなし、八十六歳の長寿で逝つた。

きぬは、兄の貞吉と美貌であつた母のことは克明におぼえていたが、この母は、洛北一円の旧農家の珍しい風習ともいえる、里親をつとめた。京の一流どころの家々から赤児を預かつて、六、七歳になるまで養育するという、いまの里親制度とはちょっと趣きは違うが、他人の子を自分の乳で育て、その報酬によって生計をたてる。いつからこんな風習が生じたか知らないが、明治から大正中期頃までは、さかんにはやつて、大正末期からこの風習は消えたという。いうまでもなく、明治以前は、京都御所に天皇家があり、公卿殿上人も多く、また、堂上華族に出入りする風雅の商人も多かったので、これらの家でも、子が生れると長男次男を問わず、里親に預けた。理由は、健康な世継ぎを得たいためであつた。いま室町あたりの旧家をみても、町家の造りは独特で、陽のささない大屋敷が多く、店と住宅も兼ねるので、商品がいつも土蔵と店の間を往来し、丁稚や番頭の行きかう埃の中で子を育てるのは好ましくない。さほど遠くもなく、人力車を飛ばせば、簡単に往還できる洛北の村に、乳のあまつた若妻がおれば、これに報酬を与えて、赤児を養育させるといふ風習も、当時としては商人らしい合理的な育児法だったかもしれない。いつの時代でも気の毒な子はいて、いろいろな事情によ

って、役所の相談係へもちこまれる。昨今は、若い共稼ぎ夫婦が、嬰兒を公園のベンチに捨てて新聞をにぎわす時代となったが、そうして捨てられた子も、里親の許へ運ばれてくる。政府にいつから、民間委託の育児制度の眼がひらけたものか。役所は捨子を預かると、乳のあまった母親をさがし、存分とはいえぬが、六、七歳の就学期まで、一人あたり月相当額の補助金を出す。乳のありあまった貧しい母親には、生計費の足し前がほしかったり、気の毒な子を育てて、その子に恩を売るといふより、無償の行為に安心を得る人もいるのだった。

きぬの母が養育した子は、このような今日の制度と趣きを異にしていて、れっきとした由緒ある家の子で、京の富小路三条の絹布問屋、植松忠助商店の長男で忠男といった。きぬが生れて約三ヶ月後のことで、きぬの記憶に忠男の赤児姿が残っているようはずもないが、冬の日、植松商店の大番頭木谷定次郎とその妻のせきは忠男を抱いて、藤右衛門方の敷居をまたいだ。

大正八年のことだから、いまから五十年も昔になる。その日は、朝から雪降り、静原の村は銀一色に塗りつぶされていた。うしろの鞍馬山も、そのまた奥の花背の山も、綿をおいたように白く、空は重く鼠色にたれこめ、粉雪はせまい静原谷の空から、音もなく降っていた。そんな悪天候のなかを、鞍馬街道の市原野から人力車を二台並べて山を越えてきた番頭夫婦は、藤右衛門の家へ着くと、生れたばかりの子をかねに手渡して、主家の名代みよだとしての挨拶をすませると、

「どうぞ、よろしゅう。大事なお子さんでございますかに、重々、心をつくしてあんたはんらのお子さんと同じようにかわいがって、元気な子こにしておくれやす。たのんますえ」

といった。そうして月々の仕送りのことや、実母が子の顔を見にくる日についてのことや、また、かねが子

をつれて静原から、ときどき富小路へ顔見せに行かねばならぬ日取りのことなど、子を養育することで生じるさまざまなことを、くわしく言い置いて、雪の静原を去った。

きぬの思い出しに、忠男の面影がはっきり映像となるのは、二歳半ばのことである。普通、人はよく幼時の頃のことを思い出して、ああでもない、こうであったかと訊ねて父母をてこずらせるものだが、母のかねがびっくりするほど、きぬは、生後三ヶ月後にきた里子の忠男のことは詳しくおぼえていた。きぬが二歳半なら忠男は二歳と少しである。記憶は、どちらかといえば忠男にあるのではなくて、八歳のとき突然風のように逝った母の、忠男を抱いていた記憶だといえたかもしれない。亡き母の追憶のなかに、己れの乳を奪って成育した他人の子の姿が、克明に宿っていた。普通の子なら、ふたつの乳房を占拠できたものを、生れながらにして、片乳を、見も知らぬ子にとられて生きねばならなかった。しかも、両乳を二人の子に分ち与えた母は、きぬが物心ついて間もなくこの世を去ったのだ。

母が分けへだてなく乳房を与えたというのは、藤右衛門の話からきぬが自分にいきかせたことであって、きぬ自身は、そのように思っていなかった。母は、いつも忠男に比重をおいて乳をふくませた。つまり、両方の乳房から出る乳を忠男が満足してむせかえるほど呑んだあとで与えた。このことは、均等とはいえぬ。二歳半の記憶に、おなががすいて母親の乳にぶらさがろうとすると、どこからか坊主頭に汗の玉をふき出した黒い子が現われ、きぬをはねのけた。きぬはのけられてかなしく泣いた。すると母親は、一瞬哀れむような眼差しをきぬに投げ、黒い子をかきよせて、きぬをよせつけぬようにした。黒い子は自分がしゃぶりついた乳房はもちろん片手でおさえて、一方の片手も、もう一つの乳房を鷲づかみにしていた。その鷲づかみした手へ、きぬ

は必死にしがみついたが、母は邪慳にきぬをはねとばした。このときの母親の眼は険しくて、にらみするようで恐ろしかった。忠男がすめばいますぐくれてやるものを、なぜに姉ちゃんのお前が我慢して待てないのか、と母はいらだった。

「うちは、小っちゃいときから忠男さんに乳とられて生きてきたさかい、こないに、いっつも心が淋しおすのんやわ」

笑い話として語ったきぬの昔話の結論は、こんな感慨になっているのだが、裏に秘めた母への憎しみは、忠男にも貞吉にも藤右衛門にも届かないところのもので、いやむしろ藤右衛門に激しくつきあたるものでもあった。きぬは、自分の運の悪さが訪れる日は、幼少期の乳房をとられて泣いた記憶にたちもどっている。母親が里子さえ預からねば、自分は心ゆたかに育ったはず、忠男がきたために、ひもじい心を抱きながら、いつも孤独に生きてきたと、成人してからもいい、盆暮に藤右衛門の許へ帰っても、背戸口から花背の山を淋しく眺めた。

「みいんな、お父ちゃんに甲斐性がなかったさかいやろ。お父ちゃんさえしっかり働いて、お母ちゃんにお金あげてはったら、お母ちゃんはんはなんも、富小路の忠男さんを育てんでもよかったはずやないか。お父ちゃんが無精して暮そと思わはったさかいに、お母ちゃんはんは忠男さん預からはったんとちがうやろか」

藤右衛門はにがりきった顔できぬをにらみ、

「お前はなァんも知らん。お母ちゃんという人は、そらえらい働きもんやった。若いときは軀も丈夫やったし、乳もよう出た。わいが反対しても、お母ちゃんはんは、里子預かろうというた。里子は何もうち一軒やない。岩倉

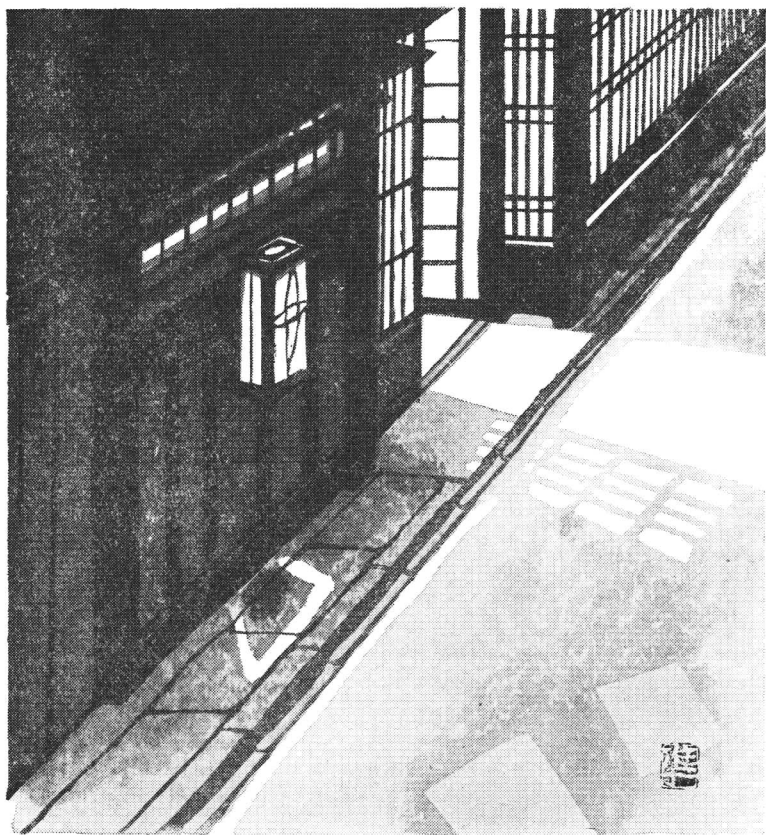
へゆきゃ軒なみそれで喰うてる。……わいのせいやない。お母ちゃんの気性がそうやったんや。お前はなんぞというと、小っちゃいときからひもじかったいうけど、わが子のお前にひもじい思いさせて、他人の子を養わなならんほど、うちは貧乏やなかった。わいは山へいって炭も焼いた。田圃もつくった。それに、富小路の旦那さんは、うちの先代がえろう世話になったお人で、わいも、お母ちゃんも、その恩に報わなならん義理があった。お前はなアんも知らん。うちの家は、富小路へ足向けて寝るわけにいかんほど……えらい恩を蒙った昔があるのんや。恩を受けたおうちのお子を育てて、何がわるかるか。お母ちゃんがお前にひもじい思いさせて、忠男さんだけに乳やったことはない。わけへだてのうお前らを育てた。死なはった人をわるいうもんじゃない。仏さんみたいないええお母ちゃんやったで」

といった。いまはもうそのような里親は静原にみつからない。きぬは、仲間のいない淋しさも手つだって、両乳を忠男さんにとられたという被害意識が日がたつほどに深く固まっていた。植松忠男によって腹の中へ播かれた終生消えぬ淋しい思いの種子や、ときぬは思ってきたし、またそのことでは、父と言いつ争いもし、妥協はしなかった。生涯かけて、温めようとしても温めきれなかった軀の冷えは、母を八歳で亡くした悲しみともつながっていたかもしれぬが、生れて間もなく乳を取られた悲しみの方が深かったようだ。

「仏さんみたいなお母ちゃんやったら、なんであんなおそろし眼で、うちをにらまはったんやろ……」

黒い子が両掌で乳を鷲づかみしていたときの母の険しい眼と肱鉄砲をくらわせた顔を、きぬは生涯忘れなかったのである。

白鼠を飼うことが静原一带に流行したことがあった。明治以来、この国には貧富を問わず流行したものがか



ずかずあり、それは戦後に、ヨーヨーやフラフープがはやったのと違って、全国どこへいっても商家でも農家でも勤め人の家でも、軒下で観賞と利殖の両得を求めたものに、明治は白兎、カナリヤ、大正に入って、白鼠の飼育がある。きぬの家でも、白鼠を金網籠に入れて、多いときは十数匹も飼った。六、七歳のことから、忠男も同年のはずで、誕生三月しか違わぬこの乳姉弟は、藤右衛門夫婦につれられて上高野の三宅八幡、貴船の奥の鞍馬寺の祭へ詣で、その帰りにかならず夜店で二、三匹の牝鼠を買ってもらった。白鼠はかわいらしかった。きぬははじめ鼠をそう好きとも思わなかったが、忠男がかわいがったので、つい自分も好きになったのかと思った。掌にのせていると白鼠は生温かくて、尻尾が固く氷のように冷たかった。体毛はやわらかくてふさふさしていたが、耳たぶの内側と、脇の裏と、口もとの皮膚だけは、桃色に透けるほど薄くて、つるつるしており、眼がいやに細くて、とがった口をせわしく髭ごとくもぐもぐさせていた。静原川の向い田圃へ堆肥を運んでいる最中に母が心臓弁膜症で倒れて家へかつぎこまれ、医者がきて注射をうっても眠ったままで、それから十日もたたぬうちに、カマキリのように痩せ細って、苦しみ悶えつつ死んだ日の翌日だったか翌々日だったか、村人たちが縁に集まって葬式の始末をしている脇をぬけて、忠男と二人で、押入れに片づけられていた白鼠の籠へ餌をやりに行くと、籠の中には、いつそんな五匹もの仔を産んだのか、知らぬまにブリキの籠底に白い仔が殖えていた。が、見ると、それらの仔はみんな死んでいた。餌かすのちらばったブリキの底へ鼠の仔はみな首を曲げて横に寝ていて、さわると冷たく、なかには手足の干からびはじめているのがあった。きぬは、忠男と籠を明るみに出したが、このとき親鼠が仔の死骸のちらかるブリキの底から、急にはしゃいだように網目をのぼり、止り木へきて、ブランコに走り移って、まるで死んだ仔の上で遊ぶようにかすかな風音をたてて

前後に振るのを見た。きぬは急に悲しくなった。母親の死んだことが、このときはじめて痛切にわかった。忠男は、白鼠の親が、いつまでもブランコに乗って死んだ仔の上で遊ぶのを、にやにやして見ていた。大正十五年の春の記憶である。

二

母が死んで間もなく、里子の忠男は、京へ帰った。就学の年がきたからである。きぬは、その日のこともよくおぼえている。月に一、二度は必ずどちらかが顔を見せ、月末には手当金ももってきた大番頭の定次郎とせきが、やはり人力車で迎えにきて、忠男は、せきが荷物からとり出した新しい着物に兵児帯を締め、これも新調の朴齒の下駄をはいて、前日に市原野の床屋できれいに刈ってもらった坊ちゃん刈りの、後頭部の少しとび出た頭をふって、車夫が毛布をのけて迎える台へ飛び乗ると、きぬの方へ、ちょっと眼をとめてにっこりし、荷物をいっしょに積んだ三台の人力車で去った。きぬは、このとき淋しく思った。兄の貞吉は、そうでもなかったらしいが、あれほど赤児のときから頭にのしかかっていた忠男が、いざ京へ去るかと思うと、その淋しさは不可解だった。その頃きぬは、すでに富小路の植松家と自家との関係について、うすうす承知していた。明治の末頃だが、先代の藤右衛門が山の仲買友達にだまされて、よく見もしないで花背の奥の杉山の売買に手を出し、それが友達も結託した詐欺手形の裏判を捺す破目になって、まんまと相手方に当時で三千円近い金の担保に、静原の土地屋敷まで人手に渡さねばならなくなったことがある。そのとき先代は、かねて岩倉の遠縁の家で顔見知りになっていた植松家へ、その遠縁の家を通じて泣きこんできた。植松忠助は、話をきいただけで

同情し、さっそく番頭と出入りの商人にいつけ、問題の花背の山を見て、それを肩代りに買い取ってくれた。藤右衛門は苦境をそれで切りぬけた。それ以来、洛北一帯に山をもつ植松家の山番のような役目を仰せつかり、いまの代になっても、秋の松茸山の差配の大半は委されることになっている。こちらが友人にだまされて、出物の山を買いそこねたのが縁で、いつてみれば肩代りで儲けられた植松家に使われる身になったわけである。

いずれにしてもこちらの失敗を助けられたことにはかわりはなかったので、きぬの父親は、先代からの恩義だと、いつもそのことを恩に着、外でもいうのが常であった。かりに、そのような恩義があったにしても、里子を預からねばならぬような貧乏はしていなかったのだから、なぜ忠男を預かってしまったのかとしつこくきくと、藤右衛門は、それはこの一帯のしきたりでもあり、健康な母親は、みな生計費の足し前を得るために、どこでも里子をうけるのが流行したというのだが、きぬは、わが子のうけた心の傷に思いやりのあるところがなればかりか、里子預かりを村のしきたりにかこつける父に抵抗をおぼえて反抗した。すると父は、「植松つあんには、植松つあんで、うちみたいなどこへ忠男はんを預けんならん事情があったんや」といって、次のような話をした。

植松忠助の妻はもと祇園新地の芸妓で、いまの「一力」の前から花見小路を下へ一丁ほどさがった東側の、「松八重」というお茶屋の抱え妓だった。妓名を八重染といった。もともと「松八重」の子ではないのだが、赤ん坊のときにどこかから貰われて、女将の子として育てられた娘である。色白で、痩せた牡鹿のような敏捷な女だった。この八重染が十九で、まださっこう髷を結っていた時期に、業者の宴会で初会した忠助が見染め、親の反対を押し切って身請けしたのである。八重染は本名を千代といったが、花街で大事に育てられてきた妓

のもつ美点も欠点も人並み以上に兼ねそなえているといったふうな女であった。忠助の親たちが案じたように、やはり、由緒のある絹布問屋の若大将の妻としては不向きな点が多かった。まず、気ぐらいが高かった。それに、水商売時代に育てた横着さがなおらず、人使いも荒かった。顔だけは十人並み以上の男好きのする器量でいながら、話しこんでみると顔の印象とは別の冷たさを感じられる若妻がよくいるものだが、千代もその例にもれない。瘦身で、骨盤が大きく、すらりとした容姿にも、どこか天性の淫乱さを感じられもしたので、惚れこんでいる忠助には、誰が何といおうと、千代は自分にとって最上の女だという自信があつて、顰蹙の眼を向ける親を叱りつけて、千代をかばい、甘やかしたせいもある。千代は植松家へ入つてますます増長慢の女になり、この結婚によって、植松家は急に影がさしたような暗さを迎えた。で、忠助の父母は、番頭や店員の手下もあるので、千代をなるべく表へ出さないように躰け、奥の若夫婦の部屋に千代を閉じこめておく方策に出た。千代は別段この仕打ちを氣にかけた様子もなく、部屋づきの女中や大番頭の定次郎をあいかわらずこきつかつて、芝居見物や、夫と共に茶屋遊びするなど贅沢三昧な日夜を送るようになった。ところが、嫁してきて半年目に子を産んだ。あるいは芸妓時代の水揚げされた人の種かと噂する店員もいたが、生れたその子は忠助にも千代にも似ていなかった。もっともこの子は、千代が乳房にしみこませていた水白粉の鉛毒で、乳を吸う頃になつて死んだ。この死因が、母親の化粧道案にあるとは忠助も当人の千代も知らなかった。それから一年半目にまた次の子が生れたが、この子も半月目で死んだ。忠助の父母は、元氣な子が生れてくるのに、乳を吸うようになると急に生氣をなくして死んでしまうのを見て、千代に内緒で医者へ相談にいった。医者は妊娠時の診断もしているから首をひねるばかりだったが、軀に遺伝的な故障がない場合は、あるいは母乳に欠陥があるやも

しれまへんな、といった。きいていた老夫婦は、それでは白粉の汁が乳にまぶさってたら毒になりますやろか、ときき直したので、医者には顔色をかえた。老夫婦は、何気なく、千代の日常を思い出したにすぎなかった。朝から晩まで、芸妓時代のような厚化粧を施して、首から胸へかけて、ペンキを塗ったように煉白粉を塗る千代を、不思議な女だと見やり、これも息子の好みなら致し方あるまい、と見ぬふりをしていた。それがいま医者の顔色ではじめてわかり、老夫婦は蒼ざめたのだった。富小路の家では若夫婦に充分な部屋数もとってあったから、さして子を別居させねばならぬ事情でもなかったのだが、このような新生児の犠牲があつて、はじめて、三番目の女兒から、里子に出すことにしたのである。

里子に出す場合は、室町新町一帯の老舗へ出入りする口入屋が仲介に立った。植松の場合は、三条烏丸を東へ入った地に暖簾を下げていた「つば家」である。この主人の野々村才三は六十近かったが、足まめに諸所を廻る働き者で、遠くは青森や秋田まで出かけて女中志願の女を見つけてきたり、若狭、越前へも行つて、店員を志す貧農の次男三男の中から、辛抱よく働く少年をよりすぐつてきて、世話する才能があつた。「つば家」の世話した子は、他の口入屋から世話された渡り者の女中や少年と違って、表裏のない性質の子が多かったため、植松家は代々重宝していた。人事のことなら才三に委せきつていた老夫婦が、一日、才三を呼んで里親を見つけてくれと頼んだのがきっかけになっている。

「つば家」は、人力車を走らせ、洛北一円の村々へ、里親を志願する、子を産んだばかりの若妻がいなか、調べて歩いた。もちろん、本場ともいわれる岩倉をさがしたのは当然である。歩いてみると、岩倉の農家には、どこもかしこも、京の里子らしい毛並みのよさを思わせる子が村童にまじつて遊んでいた。しかし、こちらに